

大和文華館の貴重図書

『拓影集—伊勢小町塚経瓦』について

難波田 徹

先日、博物館の仕事で満岡忠成先生にお会いした時、いま私が関心をもっている小町塚経瓦について大変有益なご教示をいただき、さらにこの『伊勢小町塚経瓦』の拓影集が大和文華館に所蔵されていることをお聞きした。先生は三重県出身で、大和文華館の学芸部長をされた方であり、のちに述べるように瓦経の研究のうえで注目される小町塚経瓦について私の習知しなかった収集家のことも教示いただき、新しい知見を得た思いで、今秋に予定している特別陳列「瓦経」の準備をしている昨今である。

瓦経とは、平安時代のある時期(延久3年/1071~承安4年/1174)に製作されたといわれており、生乾きの瓦板に経文を陰刻し、のち焼成したもので、当時ひろがっていた末法思想と深く結びついている。この瓦経も最近やっと歴史考古学の分野で注目され、関西大学の網干善教博士はその復原的研究をすすめられている。故石田茂作

博士もこの瓦経に注目され、「瓦経の研究」としてすでにその体系をまとめられている。私たちの研究はこれから先学の業績のうえにたつてすすめられるわけであるが、他の考古学の分野からみれば共通の財産も少なく、これからの学問である。

江戸時代の寛政11年(1799)に約500枚の瓦経が兵庫県の常福寺で発見された。この時の姫路藩主の酒井忠道はその翌年にこれら瓦経の拓本をとらせている。忠道はこれら瓦経が散佚することを予感したのかも知れないが、現在、常福寺瓦経はその一部を除いて伝わっておらず、瓦経の拓影集のみが伝えられているのである。忠道の予感があたったわけで、その見識の高さを評価しなければならないだろう。瓦経の多くは平安時代後期のものであり、経文の文字もその時代の書である。日本はともかくとして、外国でもかなりの数の瓦経が博物館などに所蔵されていると聞かすが、やはり平安時代の書

という意識が強いのであろう。このことは書道に親しんだ日本人にも共通していることである。

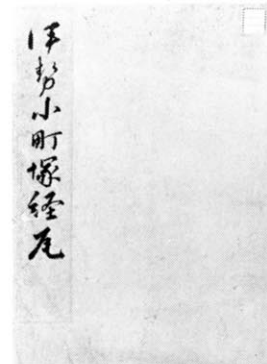
さて話を『伊勢小町塚経瓦』に移そう。満岡先生のお話を聞いて早速調べさしてもらったが、その際まず注目したのは、この拓影集の奥書である。そこには、

大正14乙丑秋脚氣に籠る
於千歳山莊 半佐子
長き夜を 秋子
古瓦うちて 多香子 拓
遊びけり むら子
かほる
洋 瓦を洗ひ
為賀 紙を切る

とあり、大正14年に七人の縁者が集まってこの拓影集を作ったことがわかる。一人が拓本の紙を切り三人が瓦経を洗い、三人が拓影をとるという分業によって、この拓影集ができたわけである。この拓影集は父親の本復祝としてその数だけ作成したと聞いている。

この拓影集に収載された瓦経は小町塚経研究のうえで注目されるものが含まれている。ことに光背形土製品2点にはそれぞれ銘文があり、荒木田五郎をはじめ瓦経製作にたずさわった結縁者の名前が認められる。経文瓦(妙法蓮華経、秘密三経が含まれる)、卍字連記の悉曇瓦経(この悉曇瓦経は裏面に陰刻しないので表面のみ拓影される)、胎藏曼荼羅瓦板(この二片は同一個体であり、一つの瓦板となる)などが収載されており、この拓影

伊勢小町塚経瓦/表紙



光背形土製品の拓影



の拓影集があれば十分である。小町塚経瓦はさきの石田茂作博士もその復原的研究(この意味はどの種類の経典が書写され総枚数が何枚であったかということであるが)はされていない。また遺跡地についても不明の部分があるということで、一般には現在は小町塚経瓦の名で呼ばれているが、且過山、あるいは菩提山、天神山などとも云われているが、石田博士などはいずれも同一のものだとされていた。しかし最近この菩提山というところから瓦経が発見されたことに関連し、小町塚と菩提山を別のものだという説もでてきている。私もごく最近この二つの遺跡について調査してきたが、後世全く変貌しており遺跡地として確認することは今となってはむづかしいという結論を得た。瓦経についても菩提山からは一、二件の出土が伝えられている程度であり、今のところは諸家に分蔵されている瓦経の復原的研究を行うことが先決であり、三重県に二ヶ所の瓦経塚があったと結論するのではなく、基礎的な作業が終了してのちにその評価をするべきではなかろうか。小町塚経瓦の紀年銘の承安4年(1174)の意味は重要であるからなおさらである。これ以後、瓦経の製作はなくなるとするのが通説であり、その翌年、法然が浄土宗を開宗する。(難波田徹氏は、京都国立博物館資料管理研究室長で、古代瓦や経塚の研究家として著名であります。)